

はじめに

学校臨床総合教育研究センター長 佐藤一子

本年報は、2000年度に開始されたプロジェクト研究「『学力低下』の実態解明と改善方策に関する実態的研究」をめぐっておこなわれた研究会、公開シンポジウム等の記録、及び学校臨床総合教育研究センター分室の活動記録を収録している。

1997年度から3年間継続した「いじめ問題の解明と解決策の探求」のプロジェクトを終了し、2000年度からは亀口憲治教授（相談援助部門）、市川伸一教授、志水宏吉助教授（研究開発部門）を専任スタッフとして第II期（2002年度まで継続）のプロジェクト研究に入った。「学力低下」問題は、周知のように各方面で議論が交わされており、大学教育や予備校などの現場でも関心が高い。その意味では、偏差値教育体制の弊害から新学力観が説かれるにいたった現代の教育政策の転換のなかで、今日的な問題としてクローズアップしてきた重要なテーマである。

2000年度の客員教授としてご協力をいただいた上野健爾先生（京都大学大学院理学研究科教授）、リチャード・L・ヘイズ先生（ジョージア大学教授）、客員助教授の奈須正裕先生（国立教育研究所教育指導研究部室長）など、この問題の第一線で発言されている方々の問題提起を受けて、現場の協力研究員の先生方の実践的関心をまじえた活発な研究討論をおこなうことができた。初年度から、大変充実したプロジェクト研究の推進となつたことにたいして、心から感謝申し上げます。

公開シンポジウムは、12月に駒場の数理科学研究科の施設を会場として開催されたが、150名をこえる参加者があり、この問題にたいする関心の高さが感じられた。比較研究や制度的課題について深めるとともに、学習支援のありかたを含めて、臨床的な問題を明らかにしていくことが本プロジェクト研究の課題である。年報に収録されている内容について、多方面の専門分野からご批評をたまわることができれば幸いである。

2000年度には、上記3名の専任スタッフ、3名の客員教授・助教授、8名の教育学研究科・附属学校の研究員に加えて外部機関の協力研究員34名のご協力をお願いした。ご多忙のなか定例の研究会にご参加下さり、コメントをいただいたことに厚く御礼申し上げます。

センターの分室の活動については、従来のカウンセリング活動（ほっとルーム）に加えて、市川伸一教授が学習相談室を開設した。附属学校の先生方のご協力による新たな試みであり、センターと附属学校の協力態勢の拡充として今後に期待したい。

学校臨床総合教育研究センターも4年目を経て順調に活動を発展させてきた。プロジェクト研究の成果の発表、公開シンポジウム、関係諸機関や現場の先生方との恒常的な交流など、センターの新たな機能の発揮が期待されているといえよう。成果を少しずつ蓄積し、共有し、発信することができるよう今後とも努力していきたい。